

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第11回 究極の「クリエイティブリユース」
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-06-20
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6238

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第 11 回

今回はイタリアの美術館で開催された「ワタノハスマイル展」のワークショップに触れたが、欧米では「クリエイティブリユース」の活動が盛んである。

「クリエイティブリユース」と言っても、耳慣れない人が多いと思う。「クリエイティブリユース」とは、廃材を再利用した創作活動をさす。日本では「リサイクル」の方が一般的だが、資源を有効利用することよりも、人間のクリエイティビティ（創造性）を育むことに重きを置いた、より積極的な意味が込められている。

写真をご覧いただきたい。これは私が所有する「アーバン・アントラー」（都会の鹿の角）と名付けられた作品である。カナダ人の作家が制作した。何を用いているか、お分

究極の「クリエイティブリユース」



かりだろうか。鹿の頭と角に見立てたのは、自転車のサドルとハンドル。自転車用品一式である。

リ美術館にある。作品名は「ブルズ・ヘッド」（雄牛の頭）。鹿と牛の違いはあるが、どちらも「見立て」の発想が

まるで子ども

のような作品と思われるかもしれないが、実はこれと同じ部品を用いたピカソのオブジェがパ

平田では「海老」を常設しているで、ご自分の目で確かめてほしい。

それはさておき、古い自転車の部品がピカソの創造性を刺激したと思うと、たかが廃材、ただの道具などと侮ることはできない。暮らしの道具を用いる「一式飾り」もまた、「クリエイティブリユース」の考え方に通じるのではないかと思えてくる。

そこで私は2017年9月、岡山の玉島に「クリエイティブリユース」のラボ（実験室）を開いた大月ヒロ子さんを訪ねた。大月さんは東京の美術館の学芸員を経て、世界中の「クリエイティブリユース」の活動現場を訪ね、創作活動の拠点を故郷に設けた。

玉島は縫製業が盛んで、ラボには使われなくなったボタンやラベルなど、さまざまな道具が色や形ごとにきれいに

分類されて、透明のケースに納められている。見ているだけで楽しく、何か作ってみたくなる。廃材が創作のための素材に生まれ変わったようである。

大月さんに「見立て」について話を伺ってみた。大月さんの活動の原点は、端材を用いて遊んだ、幼い日の「見立て遊び」だそうである。「見立て」は「アートの入り口」であり、個性的な形の廃材には想像を膨らませる鉤（かぎ）があるとお考えであった。また、近年は学校でもリサイクル用品を用いた創作活動が盛んだが、子どもの作品が再びゴミになるような活動にはしたくないと話された。

再利用の視点から「一式飾り」を見れば、作品に用いた道具は解体後も大切に保管され、新たな作品の材料として繰り返し利用される。それと共に、一つの道具の形をさまざまに見立てることで想像力が鍛えられ、創造力が育まれる。「一式飾り」は究極の「クリエイティブリユース」と言えるのではないだろうか。